

報告

## 世界史教育と外国史研究との連携・協働のための予備調査報告 —異文化理解と内発的動機づけの観点から—

Report of a Preliminary Study aiming for Collaboration between World History Education and Foreign History Studies  
from the Perspective of the Intercultural Understanding and Intrinsic Motivation

吉原秋<sup>\*1</sup>, 小川春美<sup>\*1</sup>, マーハー パトリック<sup>\*1</sup>, 鈴木道也<sup>\*2</sup>, 安井萌<sup>\*3</sup>, 小川知幸<sup>\*4</sup>,  
畑奈保美<sup>\*5</sup>, 出村伸<sup>\*5</sup>, 津田拓郎<sup>\*6</sup>, 池野健<sup>\*4</sup>

Aki YOSHIHARA, Harumi OGAWA, Patrick MAHER, Michiya SUZUKI, Moyuru YASUI,  
Tomoyuki OGAWA, Naomi HATA, Shin DEMURA, Takuro TSUDA and Takeshi IKENO

**Keywords:** World History Education, Liberal Arts, Motivation, International Posture

世界史教育, 教養教育, 動機づけ, 国際的志向性

### 1. はじめに

2006年のいわゆる世界史未履修問題、あるいはセンタ一試験での世界史離れという言説は、高校教育側のみが抱える問題ではなく大学教育及び歴史学研究がともに向き合うべき課題となっている。世界史教育の問題が注目を集めていることは、西洋史学会のシンポジウム(2010, 2015, 2017)及び日本学術会議の提言(2011, 2014)からも明らかである。現在では大学の教育・研究者の立場から、高等学校における世界史教育と大学における教養教育としての外国史概説の授業、あるいは歴史学研究の成果とを接合する「高大連携」の試みが各校において展開されつつある。

本研究グループは、これまで、上記のような今日的状況と課題にもとづく問題意識から、大学が高等学校での世界史教育と連携した教育ないし研究のための実践の探求を目指した研究・調査を継続してきた。2015年度には、現在の大学生が、高等学校在学中に世界史A、Bのいずれを履修したのか、大学受験時に世界史科目を選択したのか、という実態と、世界史学習の意義をどのように考えているのか、という意識とについて、1800人余りを対象に質問紙による調査を全国的に実施した。調査全体の結果は吉原ほか(2017)として公表している。

### 2. これまでの研究概要

履修の実態については、世界史が高校での必修科目になっているにもかかわらず、「履修しなかった」と答えた学生が9%いることが明らかになった。本当に履修していないのか、あるいは、履修したにもかかわらずそのことを記憶していないのかは不明であるが、未履修問題が未解決である可能性をうかがわせた。一方、世界史学習の必修化および意義については、肯定的に評価する学生が多く、「国際化」、「一般常識」、「何かの役に立つ」などのキーワードを基準に判断する傾向が見られた。し

かし、そのような世界史学習の意義を認めつつも、他方では入試対策や暗記に対して負担感を覚えている、というのが学生の実情であることが明らかになった。なお、個別対象群の分析は、吉原ほか(2016)、鈴木ほか(2016)、小川ほか(2017)、安井ほか(2017)として9校について為されている。

この調査を踏まえ、高等教育機関としての大学での歴史教育と高等学校での世界史教育との有機的連関のためには、学生の外国史学習意欲を促進あるいは阻害する要因は何か、また、どのような契機が教育的効果を発揮するのか、という点をさらに明らかにすることが有用である、との結論に至った。というのも、世界史学習を肯定的に評価する学生のコメントが、英語学習の動機づけが強い学生のコメントに類似している、ということが推察されたからである。外国語学習の内発的動機づけに関しては国内外で多くの研究が為されている(Dörnyei & Ushioda, 2013; 入江, 2008)（「内発的」動機づけと「外発的」動機づけの区別については後述）。また、八島(2004)によれば、「国際的志向性とは自己と世界との関わりを意識しているかどうかということに関係する」(p. 85)ので、その意識が強いと「異文化への接近動機が強く、英語でコミュニケーションを図ろうとする意志を持ちやすくなる」(p. 85)という。そして、国際的志向の強さと英語学習の動機の強さには関連がある、というのが、応用言語学の分野においては共通認識とされている。だが、その一方で、このような外国語学習の分野とは異なり、世界史学習に関しては、学習者の立場からの動機づけについて本格的に調査した研究はほとんど存在しない。そこで、上記のような外国語学習者の動機づけや国際的志向性についての研究成果と関連づけて、外国史学習者の学習動機を検討していこうというのが、本研究の目指すところである。

\*1 国際文化学科、\*2 東洋大学、\*3 岩手大学、\*4 東北大学、\*5 東北学院大学、\*6 北海道教育大学

### 3. 予備調査としての質問紙調査

そのための方策としては、学生の高校でのかつての世界史学習への意欲、態度を個別に調査し、高等学校での効果的な授業を観察する等が考えられるだろう。大学生や高校教員を対象として、特に聞き取り調査や、非参与観察などの研究手法を用いていくことを検討している。そのような調査の端緒として、岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科の学生を対象に、今後の聞き取り調査の対象者を探す目的での質問紙調査を実施することとした。

#### 3-1. 国際文化学科における調査の概要

盛岡短期大学部国際文化学科における質問紙調査は2017（平成29）年の1月と11月に同一の様式を用い実施した。調査の対象となった学生はそれぞれ1年生で、調査は必修授業である総合英語Ⅱ-Aおよび総合英語Ⅱ-Bの授業の後に、本報告の執筆者でもある担当教員2名により行われた。調査当日にその授業に出席していた国際文化学科合計99名（2016（平成28）年度の1年生52名、2017（平成29）年度の1年生47名）名の回答が本報告である。質問紙への記入時間はおよそ5分、回答は記名式で行われ、質問紙は記入後その場で回収された。回答率は100パーセントであった。なお聞き取り調査の対象者を選定するために、昨年度からこの質問紙調査は記名式で行っている。

質問の内容は以下のとおりである。

1. 高校在学時に世界史を履修しましたか。
2. 大学入学時の入学試験（センター試験含む）で世界史Aまたは世界史Bを受験しましたか。（在学中の大学には限定しません。）
3. 世界史を学ぶことはあなたにとってどのような意義があると思いますか？
4. 今まで受けた世界史の授業に関連して、特に印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

#### 3-2. 調査結果

回答結果は以下のとおりである。

質問項目の1番と2番は選択式、3番と4番は自由記述の回答であり、選択式については実数とパーセンテージを、自由記述については筆者がとくに選定したもののみ記載する。

1. 高校在学時に世界史を履修しましたか。

① はい	94 (94.9%)
② いいえ	5 (5.1%)

2. 大学入学時の入学試験（センター試験含む）で世界史Aまた

は世界史Bを受験しましたか。（在学中の大学には限定しません。）

① 受験した	31 (31.3%)
② 受験しなかった	68 (68.7%)

3. 世界史を学ぶことはあなたにとってどのような意義があると思いますか？

この質問項目は自由記述であり、その回答は多様であったため、これを区分するのに2年前に行った調査のカテゴリーに暫定的にあてはめてみた。このカテゴリーはもともと2年前の調査では「高校で世界史が必修科目なのをどう思いますか」という質問に対する回答を整理するのに用いたものだが、その際に寄せられた回答が、同調査の別質問項目「世界史を学ぶことはどのような役に立つと思いますか」に対する回答に似通っていたため、本調査における質問への回答の仕分けにも使用した。そのカテゴリーとは以下に示す八つである。

- 1: 現代の国際社会における問題を知るうえで大切だから
- 2: 日本との比較ができるし、日本を知るうえで大切だから
- 3: 世界を知り、グローバル社会に対応するため
- 4: 大学での勉強で必要だから
- 5: 一般教養として大切だから
- 6: 必修にしないと学ぶ機会がないから
- 7: 他の面で役に立つから
- 8: その他

今回の質問への回答もすべて上記のカテゴリーにあてはまる。まず、1～3に該当すると思われるのが、以下の回答である。

- 現在に続いている日本と海外の問題や、友好関係を知る上でとても大切な科目だと考える。
- 世界史を学ぶことが海外への興味や関心を持つきっかけになると思います。単に知識を蓄えるためだけの学習ではないと考えています。
- 一般教養が身につく。他国の歴史を知ることによってその国の人と関わる際のコミュニケーションに役立つ。
- 外国人と交流するときに、学んでおいたほうが相手に配慮して接することができる。

これらは2017年の報告（吉原ほか）で述べた国際的志向性にもとづくものと推定される。上述の八島（2004）が指摘するように、「国際的志向性とは自己と世界との関わりを意識しているかどうかということに関係する」。盛岡短期大学部国際文

化学科の学生は、その所属学科が暗示する目標に照らしても、世界と自己との関わりをとくに意識し、その意味において国際的志向性の高い学生が一定数入学していると判断できるだろう。一部では「5:一般教養として大切だから」に該当する記述部分もみられるが、そもそも4~6は学習に対する消極的理由としてカテゴリー化されたものであり、とくに「6:必修にしないと学ぶ機会がないから」は今回の質問内容にあまり沿っていないことを度外視しても、同学科の学生ではそれらのカテゴリーに該当するような回答を寄せることは、ほとんどなかったといえる。

次に、7~8に該当するもので印象深かったのが以下の回答である。

- 知識が広がると思います。自分はスマホゲームをきっかけに世界史についてもっと知りたいと思いました。知っていれば、テレビや本を見たとき、「この人物を知っている」となるかもしれないし、見つけたとうれしくなります。趣味を広げるために必要なものだと思います。

この回答は上記7の「他の面で役に立つから」にあてはまる。筆者の経験と照らし合わせて考えると、テレビを見ることや本を読むことが世界史の学習に役に立つと思ったことはあったが、この学生のコメントはそれとは逆順のプロセスを示しているのが興味深い。この学生は世界史学習が、テレビを見たときや、本を読んだときの内容理解に役立つと考えているのである。

「8:その他」に該当する回答はさらに興味深い。

- 歴史を学ぶことで、人々の知恵や経験を現在や未来に還元するため。

この回答はいわゆる優等生的なコメントと見て取れる。優等生的とは、教員によって想定される「正解」を探り当てようとする態度である。その意味では、この学生が本当にそう考えているかどうかは別として、一般的に言われている歴史学習の意義が反映されている。

これと正反対なのが次の回答である。

- 私にとって、とてもおもしろいこと、興味のあることなので、特別に意義があるとは思っていない。

この学生はもともと歴史学習の内発的動機づけが高いようである。内発的動機 (intrinsic motivation) は Deci & Ryan (1985) が自己決定理論 (self-determination theory) の中で定義づけたもので、それをすること自体に喜びや満足を感じられるような行動に関するものである。それとは反対に外発的動機 (extrinsic motivation) は何らかの報酬や他人に認められた

いなど、そのほかの目的を達成するための手段として行う行動に関連した動機である。次の学生のコメントも内発的動機づけに関連したものと見て取れる。

- 物語は小説を読んでいるようでおもしろい。過去の出来事を今の似た事と結びつけていかせる。文化や歴史を学び、考え方を広げ、差別や偏見を無くせる。

以上のように、全体としては少数であれ、瑞々しさや内面的な輝きまでも感じられるような、内発的動機づけにもとづいた学習意欲を推測させる回答が得られた。いずれも利便性や実用性ではなく、おもしろさや喜び、満足感といった個人の情動と結びついていることが特徴である。自己の充足が内面的な深化を導き、自己決定へとつながるとすれば、他者との違いの認識、そして世界への関心と拡大し、またチャンネルが確立しさえすれば、世界から自己へのフィードバックも起こりうるだろう。本稿が提案する、内発的動機づけの観点の重要性である。

最後の質問は個人的体験の回想を伴い、そのときの心の動きを呼び起こすものになっている。

4. 今まで受けた世界史の授業に関連して、特に印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

この質問は今後、内発的動機を促すような授業を展開している高校教員への聞き取り調査につなげるためのものであるが、同調査でも高校の教員の工夫を感じさせる興味深い記述が見られた。

- 「ある人物が~をした」とすぐには言わず、隣の人と考える時間をもらって、自分たちならどうするかを考える時間があって楽しく考えることができたし、覚えやすかった。

- 説明を聞いてほしいという理由で、先に板書をノートにすべてとってから、先生が説明をするという授業スタイルが新鮮でした。先生が、教育関係者から、授業で生徒に緊張させることが一番良くないと聞いたらしく、生徒に当てるということをせず、先生が質問したとき、生徒が自由に発言するという授業でした。年号や人の名前を語呂で教えてくれました。

- 世界史の先生がヘタリア好きで、授業の中でもヘタリアのマンガを使って説明してくれたのでとてもわかりやすかった。

(筆者註:「ヘタリア」とは各国の国民性や歴史などの特徴をモチーフに世界の国々を擬人化したキャラクターによる歴史コメディ。日丸屋秀和によるマンガ)

- 世界の国歌を聴いて歌詞について考えた。
- 授業で学んだ中で、気になった人物について、絵などを描いてレポートでまとめた。
- 歌で時代の流れを覚えたのが印象的でした。

上記コメントから、教員も一方通行の講義形式により、受験に必要な知識を授けるだけではなく、生徒に考えさせたり、体験させたりしながら学ばせるような工夫を凝らしていることが分かる。

すでに川井正士(2010)は、現行より一つ前の学習指導要領にもとづく中学校歴史教科書において多数の事項が削減されたことに対応し、生徒たちが「イスラーム教の名も、アラーも、マホメットの名も知らないまま、同時多発テロやイラク戦争のニュースに遭遇する」ことを高校教員として危惧し、「メッカはイスラーム教の聖地だが、転じて何かの発祥地を意味する(～のメッカ)」とか、「インドで発明された数字をヨーロッパ人がアラビア数字と呼んだ(数字の伝播順がわかる)」とか、「勝利の女神サモトラケのニケ→NIKEのマークはこの羽根の形から考案された」とか、生徒の印象に残るエピソードを都度挿入することで自発学習のきっかけを作ろうとしていた。また、2008年からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)、2014年からスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定された玉川学園高等部・中学部では、MMRC(マルチメディアリソースセンター)を中心として、学年をこえた探究型学習の実践を積み重ねている(後藤芳文ほか(2014))。永松靖典編(2017)は、アクティブ・ラーニングを掲げて「歴史的思考力を育てる」授業に理論、実践の両面から取り組んでいる。

#### 4. 今後の展望

この調査は、聞き取り調査対象者を求めるための予備調査であった。研究は初期段階であるが、世界史学習、外国史研究の連携的取り組みにおいては、学習の意欲や学習の深化にとって内発的動機づけが重要な観点であり、それには情動の役割も決して無視できないことが理解された。次は実践のためのメソッドとの組み合わせを探索することが課題であり、現在は、この予備調査にもとづいて選定した学生に対して、聞き取り調査を進めている。また、同様の質問紙調査を他大学等の教育機関で実施し、聞き取り調査も含めて全国的に研究を進めていく予定である。

本報告では高等学校での世界史教育を扱っているが、大学での外国史教育のあり方も研究全体の重要な論点である。大学での歴史教育を取り巻く現状および大学生の意

識については鈴木ほか(2018)の報告を参照されたい。高等学校での教育や大学での教養教育によって「歴史を学ぶ楽しさ」を知った学生がいるとして、彼らを歴史学研究という新たなフィールドへ連れ出すことも、研究教育者の使命であることをこの報告が伝えている。同様の問題関心によるものとして、大学の歴史教育を考える会編(2016)が、歴史学を専攻する学生を対象に、高等学校での授業から大学での学びへのスムーズな移行を目指している。

なお、本研究は、岩手県立大学学部等研究費(研究課題名:『異文化理解教育の観点から探る岩手県における世界史教育の現状と課題』(代表 吉原秋))から助成を受けたものである。

#### 5. 参考文献

- 入江恵(2008)。「英語学習動機づけ研究:L2セルフシステム理論とその応用」『桜美林英語英米文学研究』, 48, 33-48.
- 小川知幸, 吉原秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 畑奈保美, 津田拓郎(2017)。「高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』, 第19号, 67-73.
- 川井正士(2010)。「生徒の実態に即した『世界史A』の授業改善の試み」『高等学校世界史のしおり』帝国書院, 1-12.
- 後藤芳文, 伊藤史織, 登本洋子(2014)。「『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版部。
- 鈴木道也, 吉原秋, 小川春美, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎(2018)。「大学における世界史教育の現状と課題(2)―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』, 第20号, 47-56.
- 鈴木道也, 吉原秋, 小川春美, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎(2016)。「大学における世界史教育の現状と課題(1)―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』, 第18号, 65-71.
- 大学の歴史教育を考える会編(2016)。「『わかる・身につく 歴史学の学び方』大月書店。
- 永松靖典編(2017)。「『歴史的思考力を育てる―歴史学習のアクティブ・ラーニング―』山川出版社。
- 八島智子(2001)。「『国際的志向性』と英語学習モチベーション:異文化間コミュニケーションの観点から」『関西大学外国語教育研究』, 1, 33-47.
- 八島智子(2004)。「『外国語コミュニケーションの情意と動機:研究と教育の視点』関西大学出版部。

- 安井萌, 吉原秋, 小川春美, 鈴木道也, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎 (2017) . 「世界史学習に関する岩手大学生の意識調査」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 16 号, 93-102.
- 吉原秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎, 池野健 (2017) . 「世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究展望」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』, 第 19 号, 63-66.
- 吉原秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎 (2016) . 「世界史履修に関する短大生の意識調査」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』, 第 18 号, 59-64.
- Deci, E. L., & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory in human behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2013). *Teaching and researching: Motivation*: Routledge.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54-66.